

序

富山大学杉谷キャンパスは、医薬学についての教育研究機関及び地域における医療の拠点として、医学部、薬学部、和漢医薬学総合研究所及び大学附属病院の4つの教育研究部局を有しています。毎年刊行され広く公表している、同キャンパス全教員の研究業績を取りまとめた『富山大学杉谷（医薬系）キャンパス研究活動一覧』は、今回の刊行で再編・統合前の旧富山医科薬科大学の頃から数えて第34輯となりました。

既に深化の進んでいるわが国の少子高齢化は、超高齢社会と呼ぶべき状態であるとも考えられ、顕在化してきている新たな社会に対応していかなければなりません。

個々人が医療への積極的な関与を行うことはやはり大事であり、一方で健康の維持や疾病の予防を日常の中で高く意識すると共に、もう一方で、いざというときに高度な医療を受けられる医療環境を、社会的な責任において整備しなければならないと思います。

現在は、地方における医療の不安が顕在しています。医師不足、看護師不足が、身近な問題として捉えられ、量的な水準の確保を不安視する報道等もあります。

そんな中、先日、富山大学看護学会学術集会（平成23年3月5日、杉谷キャンパス看護学科棟で開催）に、参加しました。水準の高い看護学の一端に触れる機会を得ることができ、質的水準の確保がなされていることを知る良い機会になりました。この折には、私も、社会科学の観点から意見を述べさせていただきました。

私たちは既に到来している超高齢社会に対して、これまで以上に個々人が健康・医療問題に関して敏感に、そして正面からの受け止めが必要になっています。自らの責任と努力で健康を維持すること、たとえば加齢による身体能力の衰えを常に意識して、若い頃のような動作はできなくなっていることを頭の隅に置くだけでも、その効果を上げることはできると思います。超高齢社会を支えるには各個人の力が大きく、自分の健康維持が、直接、地域社会の医療環境向上につながることを絶えず考えることが必要です。

個人の力を得た医療環境・体制にさらなる一助を加えること、この『研究活動一覧』の発行には、そういった意義が見いだせます。

最後になりましたが、今回の研究活動一覧刊行にご努力された編集委員の方に厚く御礼を申し上げ、本誌を活用いただける研究者の方々には、本学に対する引き続き忌憚のないご意見・ご指導を賜りたく存じます。

学 長 西 頭 徳 三
Saito Tokuso